

日産婦周産期データベースを用いた分位点回帰分析 による妊娠中体重増加の出生体重への効果の解明

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD学会 公開日: 2022-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 憲子, 春山, 怜, 宮坂, 尚幸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00004028

第 10 回日本 DOHaD 学会

<一般口演 5>

日産婦周産期データベースを用いた分位点回帰分析による妊娠中体重増加の出生体重への効果の解明

1 東京医科歯科大学難治疾患研究所、2 国立国際医療研究センター国際医療協力局、3 東京医科歯科大学生殖機能協関学

佐藤 憲子

春山 怜 2, 宮坂 尚幸 3

【背景・目的】

早産、SGA、妊娠合併症、妊娠高血圧腎症の発症率が最小となる妊娠中体重増加量 (GWG) 範囲は、妊娠前の体格指数 BMI に応じて調査され、特に BMI が 18.5 未満の場合に GWG 不足による胎児発育不良リスクの上昇度が高いことが報告された。しかし、GWG 過不足が胎児発育に与える影響には、BMI 以外の個人的因子が大きく関与しており、より最適化された体重増加の指導には、まだ明らかにされていない個人的因子の同定が重要である。我々は、これまで 2013-2017 年の間に東京医科歯科大学附属病院で出産した妊婦 (n = 1114) を対象とした後方視的解析により、GWG 単位変化量あたりの出生体重変化量は児のサイズによって実質的に異なることを報告した。そこで、全国規模の健常な単胎正期産妊婦を対象として、その結果の再現性を検証することを目的とする。

【対象・方法】

日本産婦人科学会周産期データベース (2013-2017) に登録されたデータのうち、外れ値、欠損値、多胎、合併症、既往症、基礎疾患、感染症、新生児仮死等を除く約 5 万人の正期産症例を対象とした。出生体重を被説明変数、GWG を説明変数、在胎週数、児の性、妊娠前 BMI、身長を共変数として、分位点回帰分析を行った。

【結果】

大規模な正期産症例を対象とした解析においても、GWG 単位変化量あたりの出生体重変化量は、児のサイズによって異なり、出生体重の 0.1 分位点における分位点推定値は 0.5 分位点における値と比較して顕著に低かった (Wald test, $p = 5.6E-09$)。

【結論・展望】

妊娠前 BMI のみならず、他の個人的要因を考慮した GWG 適正範囲を算定する必要がある。今後、周産期データベースを用いた様々な交絡因子の影響の検討及び、GWG—出生体重に与える母児の遺伝的要因の影響の解析により、体重増加の個別化指導に有用な知見を提供していく予定である。